

まごころだより

2019. 1月号

「私たちの老後はどうなるんやろ？」という利用者同士の話が耳に入ってきた。

二人とも介護施設に通っているんだから、既に老後の仲間入りしていると思うんだけど・・・と思いながら私は話を聞いていた。

「私んところは女の子二人いたけれど、二人とも遠いところに出してしまった」。そう言う彼女の娘は毎日のように電話をかけてくるという。通院などの特別な予定がある時は、母親がスムーズに行動出来るようにと、私たちの介護施設にも連絡してきてくれる。そんな連携プレーが功を奏してか、大きな問題もなく一人暮らしを続けている。

「少子化で子供がおらんようになったから仕方ないんだよ。み～んな一緒」もう一人の彼女が言う。彼女は看護婦だった経験を生かし、介護施設にボランティアに来ていると思っている。職員もその思いに寄り添い、他の利用者の体温や血圧を測ってもらい、自分たちの健康相談にも乗ってもらっている。そんな彼女は「ここに来て、みんなと喋るからいいのよ。家にじーっとしていたらボケてしまう」と事あるごとに言い、かいがいしく働く。



二人の話聞きながら、私は高校時代の仲間と会った時のことを思い出していた。友人と会って必ず出てくる話題は病気、年金、老後。偶然だが、みんな舅や姑の世話をした経験がある。だからだろう、子供には迷惑はかけられない、動けなくなったり、認知の症状が出たりしたらさっさと施設に入ると言う。そして「どお？やっぱ施設だよ」と私に半ば同意を求める。

「でもね」と私は言う。民間の入所施設に入るには高額な費用が必要となり、私たちの年金や貯金では無理かもしれない。今流行りのサービス付高齢者住宅というものもあるが、そこそこ元気な人のための住宅であることも多く、終の棲家とは必ずしもならないのが現状。所謂特養と言われる老人ホームは順番待ちの状態。噂によると部屋やベッドは空いているが、介護人材の不足で満床に出来ないとか。話はだんだん暗くなっていく。そんな話

をすると「じゃあ、私たちの介護は誰がしてくれるの？」ということになる。



国はそんな現状を踏まえて、最期まで住み慣れた地域、自宅で過ごすことを薦める一方、機械や器具を利用した介護やロボットの積極的導入、それに外国人労働者の受け入れを進めている。

機械や器具を利用した介護と言われて、私の頭にまず浮かぶのは、リフトで釣り上げてお風呂に入れたり、箱に入ってお湯に浸かったりという機械浴。また最近では癒しや見守りのための介護ロボットも脚光を浴びている。ぬいぐるみの犬に話しかけると返事をするし歌も歌ってくれる。これで認知症状が改善したという報告もあるらしい。時代の要請も後押し、人工知能を搭載したロボットが次々と開発されている。



食事会では、認知症状のある方に、受付と食事のお手伝いをお願いしています。

もう一つの打開策として考えられている外国人労働者。日本語を喋れるのが条件らしい。その意味では最低限の会話は可能。文化や習慣の違いはあるが、同じ日本人でも地域や世代間の考え方の違いは大きいから、日本人も外国人も同じかもしれない。

「私達の老後は外国の人に託すか、ロボットに任せるか、どちらかかもしれない」と言う、「気兼ねしなくていいからロボットがいいわ」というのが友人たちの結論だった。

「うーん、そうか。私たちは人間ではなくモノ扱いか。それも悲しいなあ」と私は思う。

そんな話を思い出して、自分たちの老後に不安を感じている目の前の二人に聞いてみた。「少子化でね、人がおらんようになるんよ。子供も当てにできんしね。それでね、私たちの介護はロボットか外国の人かどちらからになるかもしれないんだけど、どっちがいい？」

もと看護婦の彼女はすぐに「外国の人がいいなあ」と言う。「どうして？」と聞くと「だって、いろんな話ができるもの」話好きの彼女らしい予想通りの答えが返ってきた。



現在介護を必要としている高齢者の多くは、寂しさを感じている。だからロボットではなく、人なのだと思う。介護施設に来ると「おはよう、待ってっったよ」と声をかけてくれる人がいる。「これ、おいしいね」と言う相手がいる。「悪いけど、手伝ってもらえる」と当てにされることもある。そんなささいなことが喜びとなる。みんな人の暖かさや生きがいが欲しいのだと思う。でもそんな思いでとった行動はしばしば周囲の者によって止められてしまう。

介護って相手の気持ちを想像することさえできれば、そんなに大変なことでも、難しいことでもないと思う。でも相手の気持ちになることは難しい。相手の思いを想像し、かなえようとする前に、自分の都合や考えで相手を抑え込んでしまう。

まごころの理念の一つに「振り回されることを良しとする」というのがある。止めるのではなく相手の気持ちに寄り添い、振り回されようというのである。たとえば、どこかに出掛けようとしていたら、「どこに行くの」

「寒いよ」「危ないよ」と言って止めるのではなく、とにかく相手の気持ちに寄り添い一緒に出掛けてみようというのである。でも、そうすると「転んだらどうするの」「風邪ひいたらどうするの」という声が聞こえてくる。そしてそう言われると何もできなくなってしまう。確かに動かなければ転ぶことはない。外に出て行かなければ、迷子になることも風邪をひくこともない。とても安全だ。しかしそれでは生きていくことにはならない。私たちは危険と裏腹のところで冷や冷やしながらか見守り、相手の気持ちに寄り添おうとしている。それが「振り回されることを良しとする」である。高齢であつたり、認知症状があつたりするからこそ「今」を大事に生きてもらいたいと私は思う。そして私たちは今年も利用者の「今」の気持ちを大切に、心を満たす介護を目指したいと思う。最後になりましたが、今年もよろしくお祈りします。



1月の行事予定

- 7日(月) かわいい小物づくり
- 9日(水) ハーモニカ伴奏でうたいましょう
- 16日(水) 惣菜またはお菓子づくり
- 21日(月) ピアノに合わせてうたいましょう
- 23日(水) 民謡と三味線の演奏
- 24日(木) 林夫妻の歌謡ショー
- 31日(木) おしゃべり・にぎやか食事会